
妹

amanojyaku

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妹

【コード】

N6162C

【作者名】

amanojyaku

【あらすじ】

妹の上京から半年。私は、何の連絡もない妹に会いに行くことにした。

今年の春から、妹は大学進学とともに上京した。妹が生まれたとき、私はもう小学生だった。

かわいい、かわいい妹。

いつも私にくつついてきた妹。

そんな妹がもう大学生だなんて。

妹は私と正反対の性格の持ち主だった。

冷静沈着。頑固。努力家。人見知り。

妹は人付き合いが上手くない。

私のように単純で誰とでも仲良くなれるような気軽さを持ち合わせていない。

そんな妹が上京なんかして、一人でやっていけるのだろうか。

私はとても不安だった。

何くわぬ顔で「行ってきます」と言っただけで家を出ていった妹。

私はその後を追いたい気分だった。

いつそのこと、妹と一緒に暮らしてしまおうか。

そうすれば、妹も私も寂しくない。

いや、妹は寂しいだなんて思っていないだろう。

そんなことを考えているうちに半年がたった。

妹からは一回も連絡がなかった。

そんなある日、私は出張で東京へ行くことになった。

私は真つ先に妹の元へ行くことを考えた。

こっそり行って驚かしてやろうとまで思った。

仕事が予定より早く終わったため、デパ地下に寄って妹の好きなモンブランを手土産に買うことにした。

電車の中で私は妹のことを考えた。
やつれてないかな、とか、変貌してないかな、とかなんだか遠く離れた恋人に会いに行くような気分だった。

駅から妹のマンションまで歩く間、私はずっとドキドキしていた。会ったらまず「来ちゃった」と可愛く言ってみようかと考えたが、恋人でもあるまいし気持ち悪いと言われそうだったのでやめた。

インターホンを押す。

ピンポン。古ぼけた音がした。

・・・

ピンポン。

・・・

私はドアノブを少しひいてみる。

開いてしまった。

いや、私が開けたんだ。

なんだか胸騒ぎがする。

嫌な予感。

違う、違う。そんなんじゃない。

恐る恐る目をやると、妹の長い美しい髪がふわふわと揺れていた。

良かった。妹は生きている。

しかし、まだ胸騒ぎがするのはなぜだろう。

次の瞬間、私は全てを理解した。

妹は金髪の男と抱き合っていた。

ああ、そうか。

妹だってもう18だ。

それぐらいのことがあっても当然だ。

私はお土産のモンブランを玄関先に置いてその場を後にした。

2、3歩歩いて、また戻ってやつぱり持ち帰ることにした。

階段を下りる音と妹の喘ぎ声とがなんらかのハーモニーを奏でてい

る。

私はその夜、妹の気持ちよさそうな顔を思い出しながらオナニーをした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6162c/>

妹

2010年11月27日15時12分発行